

難民保護制度の破たん 変革を拒む国々

洋上で見はなされて

2015年3月、3歳のシリア難民の遺体がトルコに打ち上げられ、その衝撃が世界を駆け巡ったことをご記憶でしょうか。その後、欧州各国は地中海での捜索・救助活動に乗り出し、何千人もの命が救われました。しかし、今また、保護を求めて地中海を渡る人たちに目が向けられなくなっているようです。衝撃写真から4年。今号では、地中海での現状を見えます。

「欧州難民危機」——この言葉が使われ出したのは2015年。欧州に大量に難民が流入した社会問題を指す言葉ですが、難民危機はなにも2015年に始まったわけではありません。いわゆる途上国に押し付けていた「危機」が欧州に到達し、難民の保護に真摯に向き合ってこなかったことが露呈した年、と言うべきかもしれません。この危機は、欧州の政治風景を変えました。そして今、いかにして流入を阻止するか、ということは、各国政府の課題に

なっています。地中海を渡ってくる難民・移民への対応も、例外ではありません。アフリカの国々を逃れて欧州を目指す人たちがとるルートのひとつが、リビア経由で地中海を渡るというものです。最近まで、欧州各国の救助活動では、救助した人たちを欧州に連れて行きました。拷問や拘束の危険のあるリビアに送り返すことは、国際法違反ですし、非難の的にもなるからです。

難民・移民を入れたくない。でもリビアには送り返せない——欧州各国が考えた策は、リビアを支援することでした。リビアが捜索・救助活動ができるよう、沿岸警備隊をさまざまな面でサポート。船を供与したり、乗組員を訓練したり、計画・調整を手伝ったり。そして極めつけが、2018年6月に地中海中部を「リビアの捜索・救助海域」と定めたことです。遭難事故が最も多いこの海域の救助責任をリビアが負うことになったのです。しかし、この策が上手くいっていないのは、冒頭の事件を見れば、明らかです。

また、リビアに送り返された人たちが拘束されたり、拷問されたり、強かんされたりという状況は変わっていません。欧州各国政府は、このことには目をつぶっているようです。

不公平なシステム

海を渡って欧州を目指す人が減っている中、欧州各国が行っていた地中海での救助活動も縮小傾向にあります。しか

し、遭難事故がなくなっているわけではありません。犠牲者の数は2016年をピークに減少してはいますが、それでも2018年には2千人以上が、命を落としています。1月19日には、計120人を乗せた船2隻が遭難し、170人の行方が分からなくなっているという報道もありました。政府に代わって、多くのNGOが救助活動をしています。救出後の上陸を拒まれる事態が起きています。特にイタリアとマルタで顕著ですが、その背景には、EU内における難民申請のルールを定めたダブリン規約があります。(EU加盟国だけでなく、スイス、ノルウェー、アイスランドも、この制度に参加しています。)

同規約ではEU加盟国(と非加盟の3カ国)で庇護を求める人に対し、最初に入った国が難民認定手続きを行わなければならないと定められています。これは二重申請を防ぐために設けられたルールなのですが、リビアから地中海経由で来る場合、地理的条件から、どうしてもイタリア、マルタに集中してしまうのです。審査中の住まいの提供、認定結果後の対応——認定された人の社会統合や不認定となってしまった人の送還——など、その負担はかなり大きなものであることは、想像に難くありません。もちろん、100万人単位の難民が流入した時期は、柔軟に運用されていたようですが(厳格に守っていたら、入口国は財政破綻してしまっただけ)、今は、極右勢力が自国への難民受け入れを拒否する言い

訳にもなっています。2019年1月8日には、スペイン当局がNGO オープン・アームズの救助船の出航を許可しない、ということも起きています。

命を救うために

2017年、欧州議会はダブリン規約を変更し、到着国だけでなく加盟国全体で負担を分担することを提案しました。しかし、自国の負担を嫌う複数の国からの反対に遭い、実現しませんでした。

欧州委員会のデミトリス・アヴラモプロス移民・内務・市民権担当委員は、「今は欧州にとって誇れる時ではない。EUは人間の価値と連帯を体現したものだ。この2つが崩れてしまったら、それはもう欧州ではない」と言います。もちろん、今も欧州の市民の多くは、この2つを大切にしており、何が何でも流入を阻止するという政策は、広く支持されているわけではありません。命を救いたい、と思っている人は大勢いるのです。

ダブリン規約の制度は、現状に対応したものになっていません。まずは公平な制度への変革が不可欠でしょう。海を渡ってくる非正規移民の命が心配、というのなら、正規の道を増やし、移民の統治をより良いものにしていくことも必要です。

その実現には、移民・難民を悪者にする言説や、移民・難民を利用する政策に「ノー」を突きつけ続けることが、大きな力になるはずだと。

2018年末 地中海を漂った 49人の命

- 12/21 32人が欧州を目指し、ゴムボートに乗ってリビアを脱出。その中には、女性が4人、保護者のいない10代が4人、6歳の子供が2人、赤ん坊も1人いた。
- 12/22 地中海で難民救助に当たっているNGOの救助船「シーウォッチ3」が、公海で彼らを救出。イタリアとマルタの関係当局にコンタクトすると、リビアに連絡するように指示される。その海域での捜索・救助の担当は、リビアだったからだ。しかし、リビアからの返答はなかった。そこでシーウォッチ3は、ゴムボートに国旗が掲げられていたオランダの当局に連絡。だが、32人に安全な場所を確保するのは、船長の責任だと突っぱねられる。どこに上陸すればいいのか指示のないまま、シーウォッチ3は一番近くの安全な場所であるイタリアあるいはマルタへと船を進めた。
- 12/28 マルタ当局は再び上陸を拒み、マルタの捜索・救助海域から出るように命じる。
- 12/29 ドイツのNGOシー・アイの救助船「プロフェッサー・アルブレヒト・ベンク」が、別の17人を救助。リビア当局は救助活動をこれ以上行わないようにと通達していたが、人命がかかっているのだと、敢行したのだ。イタリアの沿岸警備隊にコンタクトをとると、リビアとドイツが担当だと言われる。リビアの捜索・救助海域で、ドイツの旗を掲げていたからだ。リビアの沿岸警備隊は救助船に近づき、船から船へ17人を移すよう指示、ドイツ当局もその指示に賛同。乗組員はリビアに送り返すのは国際法違反だと拒否し、欧州へと進路をとったが、各国は上陸を拒む。
- 12/31 天候が悪化。救助した人たちの体調もよくない。
- 1/2 嵐の中、マルタが接岸を許可。一方、欧州各国政府は、イタリアかマルタに上陸した後になら受け入れを検討すると言う。しかしイタリアは上陸を拒否。マルタ政府も、以前に救出した249人の一部も各国が受け入れるなら上陸を認める、と条件をつけた。
- 1/9 ようやく話し合いがまとまり、2隻の船にいた49人は、マルタに上陸することができた。この後、8カ国により支援を受けることになる。

